



魂  
潜  
寂  
禁  
  
地



5  
1859  
2



俳諧寂琴卷之中

白雄坊選著

拙堂増補

昭の事



昭と字昭をさうめてのち魏向を  
半らへし字昭を礎よりぬく十日去  
うきし句意とて水入とてさへ上下の  
端あり

漢さうの

八九間やうる障る柳の南 公羽

まろの鳥の圃ある 古亭 沽圃

まろの鳥の圃

古亭

一

是より場の字解をいふ

赤川集

荊株や水田のくしの秋の雪 酒堂

雪ふるも月よ代かゆ 嵐行

是より赤川集の出るは人よ時を  
うら歌よとてめもうら

炭を

梅うまよの山に月あはる 翁

少きうらうら 野坡

是より赤川集の出るは人よ時を  
うら歌よとてめもうら

うら

市中ののく白くもまの月 允兆

いづし〜門くの字 翁

大石園号

か月あもあつたは上川 翁

岸ふほつたはくみ 一榮

是より赤川集の出るは人よ時を  
うら歌よとてめもうら

中

あけぬけ 魏魏のまよかきしほひる  
あてもみあし ちりりえこ

らむむら

心ん 松世のまよの浦のき 加生

鴨こねを 春の風入るこの月 其角

是てるる 合の招きてり 合の浦よ  
海よ 山さるとみまゝくしてり  
このよの 今をしのいそねを  
まよたる招こ

あけぬけ

ほろふさ 浦のぬんのおもあし 荷分

あつたふよ 春のまよの戸の口 野水

是あつたふの 浦のぬんのおもあし  
ととけの 待とりのまよの  
戸の口 春のまよの  
まよのまよの

まよの日

軽のまよて ねしと 春のまよ 野水

新し 春のまよのまよ 旦葉

是し 人情の招こ 人情の招こ  
まよのまよの 春のまよの  
まよのまよの 春のまよの  
まよのまよの 春のまよの

まよの日

まよのまよのまよのまよの 野水

指の楯の落けしと 且藁

是は古の指の楯と云ふはかくのこく  
はしりしを礎と云ふは古式あり  
まらあまをこしふ舟の楯をこしむ  
さのこは上下の楯ありてまらこ舟の  
楯をこしりてまらこ舟ありて

ひさこ  
ひさこの名もゆきしはまのま 珍碩

ひさこして楯のまらこめぬふ 翁

こころもふふ舟の楯と云ふは  
あまのこころをこしむは  
まらあまをこしむは  
まらあまのこころをこしむは

好むぬらこ

みさの日  
おお月や霧のはらりてあまのま 荷分

みさ乃朝日の表形をま 翁

是もふふ舟の楯と云ふは  
まらあまをこしむは  
まらあまのこころをこしむは  
まらあまのこころをこしむは

深川をこしむは

ひさせ  
一ふもまらあまのま 越人

酒志おほらうらみの此の月 翁

是宿答の銀と宿答の銀の遠路を  
ゆきとて捨ててゆく人の宿答の自のちり  
真の自のちりを捨てるは遠路の  
宿答の自のちりを捨てるは遠路の  
銀の自のちりを捨てるは遠路の

新庄の文庫

新庄の文庫 山店

又お故年のちりてあふり 翁

是候別のちりをとるは遠路の

新庄の文庫

清きちりてあふり 破と枝屋 風流

ちりてあふり 風流のちりてあふり 翁

是真のちりをとるは遠路のちりてあふり  
遠路のちりてあふり 是候別のちりをとるは遠路の

後日記

ちりてあふり 如行

ちりてあふり 翁

是真のちりをとるは遠路のちりてあふり  
遠路のちりてあふり 是候別のちりをとるは遠路の

後日記

ちりてあふり 重五

中五

人の新いを鏡磨き 荷分

つらねいじ  
鴨鳴也弓矢を捨て十餘年 去来

又布きぬをぬの小刀 嵐雪

涿川集

年頃の危は柳の花かきむ 酒堂

狭きくさくさく琵琶のあらじ 素堂

こゝといひ俵拾をそりしるるこ自ぬり  
くまゝくつらこのむるつら

補

きりりの巻

けし形也さくさく雪ちる急氷室 藤白

金洞の郡豊浦の春 千春

これあきるの妙をあきるとあきるとあきま  
單の程とて俵拾まきいさふあけり  
自ぬのく形くつらこのむるつら

才三の事

字陀法外

陽火まよ野飼の牛の挽ぬをそ 翁

この日  
野葉中借もあぬ様の折折て

10  
歯牙の毒紙知持人の美不負く 野水

八つし

中六

嵐雪  
小貝拾て  
泥土

野水  
ひまに車を現電のかたみそ

是めて留こみ各の留めとたひすこ  
めて留を帰る哉いあこま徹とた  
ひまに車を現電のかたみそ

野水  
秋の志を形くくる月針糸

公相  
馬附のまをまの牧の野よ

こまに留なるり小留の才とる下よの  
よまかこまをまの牧の野よ

月のまをまの牧の野よ  
かこまをまの牧の野よ

まのまをまの牧の野よ  
かこまをまの牧の野よ

公義  
藤とるまをまの牧の野よ

曾良  
まのまをまの牧の野よ



是らん霜ころん 霜よふまじり  
てんてんかきあし——またり——りんてんてん  
顔ひの顔と

や さらり けさきりふら ~~~~~  
たき かり ねそ 何  
~~~~~の月をよよまきん——

<sup>あきせ</sup>夕 空 澄 け と て 冴 ま さん 冬 文

けるよふらうらうらの 河よりー 深おとりに  
やしやの文をよもる中よこあまら  
~~~~~  
~~~~~の月をよふまきり  
~~~~~の月をよふまきり  
~~~~~の月をよふまきり

河をよふらうらうらの 河よりー 深おとりに  
~~~~~の月をよふまきり  
~~~~~の月をよふまきり

<sup>うらまの</sup>雲 雀 峰 小 田 庄 子 翁  
~~~~~

<sup>深川集</sup>山 ~~~~~ 嵐 蘭

是もたうー 霜よふまじり  
~~~~~の月をよふまきり  
~~~~~の月をよふまきり

~~~~~

みづの日

花蕪馬骨のちねよ咲くつり

杜國

口をみまぬ名の中とこ五まぬ名の中と  
くつりつをよ下ののちねよ咲くつり  
あまこののちをみまぬ

飯後 門柱

くつりつをよ下ののちねよ咲くつり  
あまこののちをみまぬ

時を 机 筆

くつりつをよ下ののちねよ咲くつり  
あまこののちをみまぬ

此角

此角ちのりかふふしまるのさる

珍碩

くつりつをよ下ののちねよ咲くつり  
あまこののちをみまぬ

蘇句地香うはせの事

かきつりつをよ下ののちねよ咲くつり  
あまこののちをみまぬ

くつりつをよ下ののちねよ咲くつり  
あまこののちをみまぬ

くつりつをよ下ののちねよ咲くつり  
あまこののちをみまぬ

くつりつをよ下ののちねよ咲くつり  
あまこののちをみまぬ

又

洗深川集足よ客と名めつりつをよ下ののちねよ咲くつり  
あまこののちをみまぬ

酒堂

綿籠なりぬきむきの里 許六

鶴鷯階の鑑をつつひまぐ 翁

まぢらまぢらまぢらまぢらまぢら 嵐蘭

月の色水ものよる小軒賣 六

筑前地の山々の典薬の駕 堂

相國寺あふ人の花のゆかり 蘭

櫛の蓋しる花の行の子 翁

かくはるの内籠のる形をみてあそぶ  
お好むてあそぶあそぶあそぶあそぶ  
あそぶて百首よそそあそぶあそぶあそぶ

ふくふくふくふくふくふく

何そこえのめも花さうの也 野水

花さこちの酒念ふころもそそ 翁

又

層ゆく方や白子美松 翁

千初よむむのさうの一鹿 回 珍碩

かゝのこゝろ花の定む花のあふ秋  
あふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふ

なるゆへにそる体さうけてらるの  
あつちも踏らうたりり 膝まをたうり  
とも甘る秋の夕陽をまよも踏らうり  
さうらうこさうりの心を得てさうらう  
藪の彼岸 峯の

あつちのこさうり  
補又

夕ちのさうりまある雷のさうり 楚竹  
さうりもあつちのぬらりのさうり 東睡  
小男鹿のさうりまを射つまをさ 公翁

飛あつちのほつちのさうり月 越人  
こさうりからまをさうりさうり 荷子  
又

新在来仙

さうりぬらまをのれと肥さうり 如柳  
さうり踏まけれれれれれ 公翁

他まうらうりさうり秋まよもさうりも踏らうり  
あつちのさうり二のさうりもさうりさうり  
さうりさうり

二句一意の本

その日

秋蟬のこらふ声きくまろくさ

野水

と藤乃実けくみ素あつらま

重五

又

その日

むさありの帛きてむく世の中み

冬文

雪一筋二枚も彦ふふ家尾

越人

又

その日

顔雪一旅ふくみのふん付とあそ

去来

とちけさくくふくむくみ山引

嵐雪

又

須加川系伝

こいさ湯さのもきくあるゆふ

公翁

たふそ石の下をふふ

等窮

二る一きくをあるよみのくくくあるくく  
うく顔向をきくくくくくくくくくくく  
さおくくくくくくくくくくくく

補又

その日

牛ふくまほつくくくくくくく

調和

山鳩くくくくくくくくくくく

又

十の巻

十の巻

いしつせ

おきせのむも衣人農うらへも 函山

考の心志も富る秋の戸 執筆

こまじつこのるもとるも一巻のまかりや  
あつて  
海舟の懸る一巻のまかりや  
まかり一巻の切をけんとまかり  
一巻のまかりの也けをまかり  
一巻のまかり

於ものけのま

あつせ  
うしつせはは<sup>目</sup>こよまらて 越人

静はあよ静をまらま 其角

あつの日

又 羽と敵へ首かきとむ 重五

小こまよをとせむら 翁

又

さつり  
発のそくんを執る鈴鹿山 翁

内花頭くまよ色いこま 乙尺

又

あつの日  
巨く腐つてアそ母の妻ふ 野水

元故る草の社もやまぬら 翁

あつの日  
あつの日  
あつの日

まきの日

又

咲くけの葉もまきさ白露そ

越人

秋の和名よかき順

旦蒙

此よりけのる月日さすありありある  
所々ともふきまねあふくきとく  
秋のまのふきまねあふくきとく  
所々ともふきまねあふくきとく  
る細なり一階るもまきの合戦より秋のま  
さく所々ともふきまねあふくきとく

補又

徳川集

頬あてぬらして月をうちまめ

曲翠

悪七云傍景清々 秋 酒堂

名所ト名所を所ふ事

涼川集

涼草ハ女々うみ下屬

酒堂

伏見の意を入相あそく 曲翠

ここは涼草より伏見とみまきとくして所々とも

宇院法外

世をいハ舟の影ハの影延山 許六

庵舎の温白氷をひふえみろ 李由

さすら藤舟のさゆふして所々ともあつ

涼川集

中 古

この乃とさうの各所地名はみても  
附らうとす

深川集

初志より伊勢のあいのと初と 公翁

久ぬささるる宮川乃上 嵐蘭

是作勢とらうりて國の各所を踏く

補

不便や姨捨の月 公翁

散るる垣根を穿つ嵐宿 嵐雪

この田圃の各所より田圃の地名を踏

事なるくけかきもあはれりしる  
こゝのさうもいそふとて名を  
を踏るるゆひを味いし踏く

志半しし記附の事

白解るる

敵よたかあるむらねの事 千里

晨明ふ初まよりち鳥帽を志す 翁

又

深川集

山依を切てかきくる園の前 翁

鏡をこし初めぬ世の中 酒堂

中 古



須磨寺

又

須磨寺の汗の情を脱ぐ舞

重五

みのく、泪笛を吹くく

荷兮

又

下りまを指てがらぬ捨らじ

仇兆

みのい切こゝにふねひんよ

史邦

又

何るも長安とこそ名刺の地

公羽

匡のまろとこそを同らるる

越人

こころの一卷のりやうちのよとをへ

大勢の中の人をささむる法

入るるも、後務の浦湯の夕るる

曲翠

中よもそのの島よ山

休翁

又

こころのよの流あゝ人の人

其角

そよふ〜風やら家の編笠

こころのよの流あゝ人の人

須磨寺

重五

こゝろを月の本

お風よまうらさぬちの酒の酔

夢のうたるをさぬ月

羽笠 執筆

又

春の曉の風よ吹まうれ

野坡

馬場の雪の跡よまじ月

嵐雪

是のちを月の本武にこゝろの月ハれ  
大月をささるる月とらうらまをわく  
礎よねこをさるる月ハれまじ月  
ささるる詞の月ハれ縁のほささるる

月をぬる月 後をぬく月  
詞ハ月の本の縁をたさるる  
縁をささるる月とらうらまの礎  
ささるる

又

お風よまうらさぬちの酒の酔

園風

お酒の酔をささるる月ハれ

猿錐

古集よふくのころのころ九月もあれ  
古武をささるる月ハれ

補 他の雪のさるる顔白のさるる様の本

白解石直

稲はる秋のつら花のらうりせ 奉白

秋をみよそ花を所る月よを借ひて  
所る花みよそ一葉の類よりの他  
花のつら花を所るこの他花のつら  
花秋のつら花の内よそ正花なるへを所る  
所るのつら 又類の花つらもあると  
まけと元禄のつらよそあるとつら  
あつらつらとつら花のつらつらとつら  
なつらつら

ほたの枝み

つら火もつらも水の仇はせ 一禮

こを類の秋の花をくわるつら

裏田のまみ

つらつらつらつらつらつらつらつら 荷分

見よつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつら

つら尾集

つら不つらつらつらつらつらつら 翁

つらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつら

つら尾集

つらつらつらつらつらつらつらつら 路通

つらつらつらつらつらつらつらつらつら

つら尾集

つらつらつらつらつらつらつらつら 翁

つらつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつらつらつらつら

踏中より遠きの方の朝月夜 岱水

ふらの日

旅衣 笠よる者をうち拂ひ 羽笠

是れをぬきしむるは遠きは漢語を用ひ  
たりの是れ等もふねあふよこをたり

らんまの

糸様腹一とつちけさふきと 去来

の解いふ

こころふひの柳吉野山 仙化

世に白のさきつひへとて清きとつちけ  
ふりくむるふさうく様をさしこつち  
あれとも先とたつちけさしとち  
自ぬのくはうくむつちけさしとち

多し他のさきの花鏡のさしと古人も  
多しとさうくこころはさしとち

補 あを向の事

あしむ

花の枝は枝ありもうら山 越人

田あしむを吟を暇さし 公翁

又

無田と号也

常船山を登るゆき花咲て 桐葉

手履よりゆき連歌師の松 叩端

是文章の場の揚るやりのあきるはさき

一巻のてそりのまこと、容易に取らざるものあり  
と云ふ者の意、彼のまこと、艱難せしむる  
處、すこしばし一さりや、とて同し、とて  
所へ、いふ、秘傳の巻、ぬく、秘傳の  
まこと、このまこと、やうよつ、とて、  
秘傳、まこと、秘傳、まこと、秘傳、  
まこと、指すの、指あり、まこと、考へ、まこと、  
まこと、當時の秘傳、あるを、誦、まこと、は、  
秘傳、まこと、軸、まこと、まこと、まこと、まこと、  
まこと、まこと、まこと、

言の目

思はきまの亦九日の月をまに 荷分

君のつゝえ氷をまにけ 羽分

まこと、まこと、まこと、まこと、まこと、まこと、

山中の巻

持持てあまそむもちりかま 翁

酔狂人と強生らまに 執筆

この、北枝、曾良、祖翁、と、山中、の、温、る、ま、  
熱い、ま、ま、の、冷、の、あ、け、る、ま、ま、

活本の技巧

古くもさくも也賣とてふと 野童

鬼貫亭を馬楽堂とてふ 瓢界

まこと、鬼貫、新亭、の、祭、の、あ、ま、る、ま、

ひらり

廟中なる幣ふ胡蝶の中はしく 調和

ひらり、  
調和

調出づ母の齡いへまふ日 調和

こころの調出づ母の年かろの暮るのあけ  
るなり

海竹集

晴まのふ咽かえさるる花さかき 乙品

ふさふさふさふさふさ 八重桜の如 沾圃

こころの暮る哉尚あそむる時いかげんを  
ふさふさるるも所々ふさふさ

連歌あそばるる花をよ所々純然あそむる  
むさふさふさふさふさふさふさふさふさ  
所々あそむる時かきふさふさは係を  
所々あそむる時かきふさふさは係を  
所々あそむる時かきふさふさは係を

意句の意

ふさふさ

ふさふさふさふさふさふさ 荷兮

縁さうふさふさの眼かき 翁

又

大橋ふたりのいふをぬき送て 半残

能く湯紙のとをふさふさ 土芳

あるの正花あそむるあそむる  
所々あそむる時かきふさふさは係を

又

炭たらし

うそをの干菜きらむらのを

野坡

る子出ぬ日以内てゑんする

翁

又

あゝ野

きぬくやあるよをかきくひてやうふ

翁

風ひそたきしうのうははは

越人

又

くろの目

顔ぬしこ病よ梓やみる

雨桐

黒髪をよめぬる種切跡し荷分

くろの目の髪をよめぬる

一石の情二石のる乃情をのてゑんする  
何のこゑもあつりしもをゑんこのうらなを  
一石めて持てるこゆるは女娘をい出ておる  
伴ふよりのをゑん白しせとをゑんおるの  
さそとをゑん

補 句かゝの事

何者のこゑもあつりし道の原

是れをゑんはこゑもあつるこゑ人の集し  
とも一燈のこゑもあつりしこゑもあつりし  
えんるるかゝるをゑんあつりし

古人の名よあるへうよかゝる掛るハ  
きりぬももひくことよへへ

早し女の唇をぬあゝ〜後釋

口よ〜あゝぬ人の世の中

是いあ都めて蒼流と唱ふるその  
集中よあり意のなりあんとてら  
さつれ〜ととあゆむなるるゆた  
親み兄中君臣の間あそてたのぬ  
らあそありの旦風流〜つ〜を後  
もち〜

冰川集

掛とよ意のさ〜らをのせさ

公羽

か〜らとんよと意の情も風はもあ

か〜らとんよと意の情も風はもあ  
ら〜らとんよと意の情も風はもあ  
ら〜らとんよと意の情も風はもあ  
ら〜らとんよと意の情も風はもあ  
ら〜らとんよと意の情も風はもあ  
ら〜らとんよと意の情も風はもあ  
ら〜らとんよと意の情も風はもあ  
ら〜らとんよと意の情も風はもあ  
ら〜らとんよと意の情も風はもあ  
ら〜らとんよと意の情も風はもあ

行水の時面目をりしぬひと

ふ〜等う福ハ殿もはる知

こ〜らとんよと意の情も風はもあ  
ら〜らとんよと意の情も風はもあ  
ら〜らとんよと意の情も風はもあ  
ら〜らとんよと意の情も風はもあ  
ら〜らとんよと意の情も風はもあ  
ら〜らとんよと意の情も風はもあ  
ら〜らとんよと意の情も風はもあ  
ら〜らとんよと意の情も風はもあ  
ら〜らとんよと意の情も風はもあ  
ら〜らとんよと意の情も風はもあ

い〜らとんよと意の情も風はもあ

い〜らとんよと意の情も風はもあ



百姓を人御母の教へ

あつりゆる物々をけく世也百姓を作  
きくしつう人申しこころいふあつり  
福い元福の徳風をさる

ゆゑかゝる者いふうきなれや

いふあつりあつり

さあつりあつりあつりあつり

百姓のうらあをらの少将

とそ角の所くきふ人由縁  
所由所はうりあつりあつりあつり  
そのうち作かろの上れあつりあつり

さあつりあ品からつりあつりあつり

うき世の果は 於小町也

と所くきくあつりあつりあつりあつり  
らうふりあつりあつりあつりあつり  
非を悔ひらぬこころと白旗を掲ふりこ  
あつりあつり

藤向二句のる理屈の本

あつりあつりあつりあつりあつり

ひく声もあつりあつりあつりあつり

是年をのりあつりあつりあつりあつり

一ふたはな目をもて所のもぬらん  
又たは時をいふ、いかに

雨の音を聴きけり 六六也

真のまふかきよ 掬の小使

こころをいつとあはれし 藤のふたなるを借  
ふそのゆくまゝ人なををさるる自のるゆ  
つらさるるまゝとをのめりて  
古く日藤のるを流川をさるるうらと故  
あせをさるるまゝとをのめりて一る、風暗を  
路へ

坊主の連は油で風はく

こころ一るのむあま

たのしみ

兜の田の青中さして 九兆

かえりのあらしをよれた社あそ 公羽

白集

火ののるまゝのやまの寺 去来

ほととぎすは 公羽

こころをいつとあはれし 藤のふたなるを借

藤の借路のあらし

たのしみ

敵の門をぬるあそ 曾良

こころをいつとあはれし

中

たのしみ

かき流るる海ノ野中の地産堂 露丸  
妻あゑとこれ山犬の色 公羽

讀みかき一葉  
谷からふおの扉をたぐく 其角

る故をそらゆるひらの偷り  
顔ある都のたのまらうを 敏足

韻塞  
いづかき意もまらへき露にたれ 式水  
此色をかへて出る紫物 公羽

日辰明く畏海門堂の小方丈 訶六

美のまね  
ひらきも死をたそを写ふり 彫棠

中舟りるほも針よなるを 横几  
ありぬもすくぬふ鱈のまきさこの 公羽

其代  
空りの外障をるる松とて 露沾  
履下りたるぬはる糸の露 沾荷  
八月の露粒はる武者一人 公羽

八  
大

非

去の日

為(ま)を(ま)一(ま)の(ま)を(ま)と(ま)世(ま)尔(ま) 荷(ま)分(ま)

似(ま)体(ま)乳(ま)を(ま)か(ま)る(ま)の(ま)味(ま) 昌(ま)桂(ま)

空(ま)に(ま)拂(ま)入(ま)鏡(ま)よ(ま)人(ま)影(ま)の(ま)ま(ま) 雨(ま)桐(ま)

源川集

却(ま)を(ま)六(ま)去(ま)の(ま)行(ま)跡(ま)よ(ま)思(ま)ひ(ま)れ(ま) 利(ま)合(ま)

心(ま)ん(ま)り(ま)満(ま)ち(ま)く(ま)釋(ま)迦(ま)堂(ま)の(ま)暮(ま) 酒(ま)堂(ま)

笑(ま)そ(ま)め(ま)を(ま)思(ま)ひ(ま)入(ま)候(ま)も(ま)さ(ま)れ(ま)と(ま)ま(ま) 龍(ま)

と(ま)き(ま)い

急(ま)車(ま)と(ま)雪(ま)の(ま)音(ま)を(ま)ひ(ま)ら(ま)す(ま) 支(ま)考(ま)

海(ま)原(ま)の(ま)里(ま)を(ま)ゆ(ま)り(ま)て(ま)ま(ま)い(ま)る(ま) 大(ま)草(ま)

吟(ま)ち(ま)い(ま)の(ま)お(ま)の(ま)ま(ま)い(ま)の(ま)出(ま) 翁(ま)

この上

世(ま)を(ま)よ(ま)ら(ま)す(ま)の(ま)ま(ま)い(ま)る(ま) 源(ま)山(ま)寺(ま) 其(ま)角(ま)

乳(ま)人(ま)用(ま)ま(ま)の(ま)由(ま)を(ま)と(ま)り(ま)お(ま)き(ま) 我(ま)峯(ま)

志(ま)や(ま)ふ(ま)其(ま)の(ま)ま(ま)い(ま)る(ま)の(ま)も(ま) 倫(ま)の(ま)ま(ま)て(ま) 嵐(ま)雪(ま)

つ(ま)き(ま)ひ(ま)

梁(ま)か(ま)く(ま)と(ま)圓(ま)れ(ま)の(ま)数(ま) 其(ま)角(ま)

六

娘むすめんくもさかしのちさかた  
小原まよしの色をよきとく  
其角 嵐雪

小文存  
佛の本地を包むるあまて  
翁

らうくくと白挽出さるるまき  
おろろろそののけする竹振  
翁 山店

そとにふ  
鳥のけりたる浦の流しもの  
北枝

籠へを降つてく月のをを  
牧童

木櫃を原えて皆をるけり  
北枝

三つ葉  
あなよ泣美女衣以江に投る  
其角

かひくをくを柳のし  
松濤

世の縁と通世みのいさめを  
卷白

笑日記  
志をくも鷗あさる眉のまハ  
杏雨

結縁縁のくも移るまき  
杏農

あささるる言のけの時鳥  
落梧

あささるる言のけの時鳥  
落梧

こころせむ。

米茹飯とつとつとつと花子余 助叟

莖靴の火のぬるた如月 園女

まろよの草履つとよよ花紙と 山人

ふきの石

秋の流流のは連歌いとかうふ 翁

あつちかへ暗て富士えゆる寺 荷分

寂とと林のそけの落るる者 杜國

まげやう

老よりのそとてうとと森の尾 其角

鈴繩ふ鮭のさそふいびく飛雪 孤屋

一層のやうとと紙袋あうふく 其角

のしき

垣穂のけしきをきかひよりきて 翁

あやめふたねふ妹う夕なりえ 越人

あのをとらふとらふ流はむせ 翁

く。形。不。定。

弥勤の堂ふ思ひうち海 枳風

八

中

院

待宵の清らさるるその中  
なりの鏡のそのうきの色  
翁  
山化

狂言集

清楽ハ生るるあふかりと  
曾良

小袖をさるるをさるる戒の師  
不玉

ころ歌のあふゆるもあふゆる  
翁

續々るるの

禅寺ふ一日あふゆるのう  
里圃

擬の角のそとぬ費完  
馬寛

濱出の牛よ信をとろふ也  
翁

お江あ仙

人ひきかきとりのさるるの  
曾良

松拍をく風のゆとをたの  
石雲

る紙射さるる紙猪の産  
翁

相馬山あ仙

圓海をよとるあふの二日月  
露丸

ころ歌をちるるかたたるおあふのむ  
重行

紙を小帳としき  
翁

ひたひたのさかかみかみふくふくたるき

珍碩

現ふたうしめて月がりのうら

秋の比宮ゆのそくせうのさひりの

路通

大伴の巻

擣衣をききそ現うの糸よる

松洞

うらまへたる女よ別て日をばり東

奇香

矢負ふ猿のともえさる意種

翁身

こころの色

あはれは須海嶺の猿をよよさげそ

猿雖

雪霽の中ををばはよしとく

雪芝

志あてせと矢擣の船ふらふはし

翁お

宇陀法師

けちるをくや流月、由

李由

た邊の持持りたよ舟便

許六

朝と晩との水魚さうり

汶村

とふの口

里人ふ藤の皮ほくこと秋のる

越人

月をよ波よ重石おく橋

羽立



ころひきくる木の枝よ花の輪とえ 野水

顔寒

うららきよ留も花の木かきやそ 岱水

はらけものうらふ枝の卵とる 翁

まづ深く隠者の留まかりしを 許六

そら

終るり何掴乃指す節ふしく 翁

こころれしあををまがらんはし 露沾

志らるるがのそ記念の鼓音もまき 沾荷

そら

隠しあををまがらんはし 翁

のそらもや筑紫の枝伊勢の常 越人

内侍の携む代々の履か圖 荷兮

あそ

本堂いすこあそ登のほら建 正秀

四折後の枝をまがり給ひぬ 珍碩

歯をいすむ人の姿を給よあそ 正秀

其角

町子みくろく行敷の志

釣雪

盗人ふしきこそ妹の血を流す

翁

新丁のけきぬ園くの神

曾良

あつせ

木狭ふゆりおしおの枝

長缸

秤にかれ人々の奥

故及

世年よたるとて各々の心もあき

一井

と旅百夜

後任女きぬこころちく

其角

山より乳を呑む猪の声出

工齋

命を甲斐の掬ともえよ

枳風

其角

下りたむらうをうらめし

其角

よきよのやぬ江の海をえおして

溪石

その中なる中付くは多々の麻衣

琴風

秋塞

ふるふおきて共屋笠をくらふ

李由

いひた母の懐の食屋んそむ

木導

早更のうらむ花松の風 朱迪

さるる

又逢をぬらひし秋 翁

今もよまらぬ秋の神に 去来

ゆくゆく蓋のひそぬ半程 元兆

あきの日

血うらぬあき月のうらみ 荷分

恋のうらみ御の鐘のきこく 杜國

ふみまの納をちをたたく 野水

あきの日

麻平耶の高松よりのかきさる 野水

夕べふかぬよみ冷風葉を 元兆

軽の口まよをかきて音休す 翁兆

あきの日

的場のまよよ嘆れ山吹 釣雲

春を澄し七の年乃力石 公羽

汲ていそしく醒る井の水 露丸

中 三

古今和歌集 卷之九 十一

陸奥

月夜を礎の柱のほえうや

嵐雪

くま風もく寐えあはし

虚公

傾城のさゆりうる歌あそぬ也

其角

三つ

被甲のすこ記あさちうぬき

史邦

陣もこのうて車引さむ

允兆

うた人を招穀垣よりくらせ

翁

冬の日

余婦の君の采りんしと

重五

新子侍津浪のあよらぬゆ

荷分

佛らのわらゑゑあきり

翁

補

三葉表にさるおまへは

工山

笠あて衣の破と綴りあは

桐葉

秋の鳥の人吟をゆく

翁

己う光

安しそく多例の海系と歩後

翁

夕架の扱もつらのこま

半残

子枕り男ゆりつ付るりと組 土芳

ほろろの巻

鳥の巣をくちくちほろろと尾 翁

二月や暮り甲ゆもきとて 葉夕

ゆしよ光ふ方の明生 曾良

水鏡の巻

名をぬのみうふ山々の炭俵 翅輪

携衣くもくぬく尾まのあ 曾良

河の月も意ゆふくをかきくを 翠桃

ホニカと知

高田の雪舞をむくく也 其角

白くそふ園の跡おぬねたぬし 嵐雪

きくく ながき風の石葛もまぬ 翁

郵懐紙

雲待りつるるよせおくるる秋 杉風

末彦を新ふかきくる福まのあ 濁子

磨くちとせぬの片器の冷摘 涼葉

水鏡の巻

中

山中の巻

あゝと降たりの山の麓の寺  
遊女はも人回舎わ〜い  
あゝと降たりの山麓の寺

北枝  
曾良  
翁

あつここの山

鶺鴒の尾を松葉の園に掛らぬ  
風を身をまきくきつ付死  
華とすて木の蔭を歩きたる女

叩端  
桐葉  
叩端

別を告

山のかつたる下市の里

子珊

その外のけしきを蟻の氣むらじ

杉風

西乃月もすこあふ影

桃隣

宿屋の持お

何のらさるのふ形を蠅の糞  
おそ路〜やいけの年のお覚  
あゝと降たりの山麓の寺

瓢界  
立志  
野童

あつここの山

極お〜をさるる田の中の小田  
あゝと降たりの山麓の寺

塔山  
路通

こころその思ひ深世一人翁

原田之丞

鳥羽玉の切女多ふ来こ 叩端

急をえ破る葦葎の月 翁

秋を程多味ふその冷ひたり 桐葉

冬葉

酒天むとふりくすへ 公羽

とくくと橋の風のあはれ音 野坡

稲盗人の縄とんで屋敷 公羽

他部集

若弱の色の手あふも瑠璃しき 沾蓬

あつあつす湯の湯の敷鏡 曾良

又る秘の了供ふ今年癩瘡の痕 公翁

鹿島紀ゆ

たま鳥の火よおしゆく在り馬 越人

瓦社よあちなる月 杉風

不意を所ふ人を引さるる 苔翠

古今和歌集

百人一首

栗の葉をば

縹の仕出の流石常棣  
月影もささく御衣の衣の衣

酒堂  
詠竹  
何中

とよみゆき

やもろとよみゆき

公羽

農羽よ志を隔て馬と駕

卓袋

露志をささり

木節

ひの葉をば

拾ふの葉よ戒律の尼

調和

羽志ぬ年木の葉の葉の葉

立志

風吹くその日吹く

直方

砂川集

あふ海の人魚鳥よ也

翁

る乞の志をささり

大州

紡草をささり

惟然

素木の巻

清の扉の扉の扉

大州

野の声く

路通

大州集

大州

大州



婚の中人みろよ早桶翁

こころを落して俗よらうよ何の  
雑俗よあそびの事

縣向自他の事

硯をむくひささね捲け 自

初めの花咲きそらひら夕少ふ 時希

新よおれ終く女印群 他

け外附うことなり

むらひ火よ尻ら流也かふるらむ 他

松風落く水の切らぬ 其場

さうとて酔のよめさる明屋あ 自

いお附方なり

並あのを寝のそらくと落 時希

巡礼の子紙抱き朝の月 他

飯新目もゆきよ飯落いきまひ 他の向附

いさうさうした赤うさこの女 他の巡礼の  
あいらひ

その表もむらの名残とら 自あそびの  
向むらひ

いさうの印跡さなり

其場  
中

落瓦あししおろよ志はまきり

比留くさるのきききぬくこの舞

肴病の粥ふきけきまふらうかき

さるりのいふさるのもさる秋ちき

いふさるの介踏うさき

花よりけいさきゆいて糝ゆい

志るる居るうま人はあきり

後也先裾よむるの下向ら

際をさるいの中ふあはけし

いふさるの介踏うさき

茶よなるいひはききぬ

くももひら借日中の法垣守

ふちね杉葉をよゆさきをむる

ふらうくみらるる屋根葺の塵

いふさるの外踏うさき

鯨窟一二の鏡こころさるい

サきふあたるる教よさるる

新し我も流世ああのかき

いふさるの外踏うさき

いふさるの外踏うさき

他 自よりい

自 自のあふ

他 人のあふ

他 他

他 他に向

他 他に向

自 他に向

自

他 自よりい

他 少むさの

他 他に向

他

他 他に向

自 他に向

あはれしきその鞋は積のたききあり 自

いのちありその活糸の春 自

又よしは梅うのりの女房を連 他 自 出

けふ踏くまじ

巻くくふすもむふふまら 他

うき世の津もたのりた哉 自 他 入

西国をうへ都も旅あをきや 自

藤白と自他のことら肝要なりとてこの  
轉しをあらわしけふは踏をあらわし  
ゆめは自他のことらみそ人情あり

天 琳

踏くことらしつらも也人情うちつさる  
ときら 其場 其場のあらはし 時 其

時 天相 け五つとつらをあらわし 踏

人情をあらわさるはしつらあ

人情のるを人情をあらわさるはしつらあ

人情あるにるはしつらあ

時 其場 其場のあらはし

其場 梳ゆゆきを門の馬はたれ

補 うけらふりそを川筋

其場の  
ありん

補 赤くすきしはたのさわ  
仇るふらうる双六の石

時

日いらもくく入相の鐘

補

過水の香は早朝のほしき

時節

雨の松門田の輪紫穂は出く

補

時を暮く鳴て魚をくり

天相

雲とくく空は回く風をて

輪  
補

青天よ有明月の乾ほを

しつても人情なをさるるの  
ま場のありん 野山海川あをり  
まてま場のありん 碓氷戸  
時節とくく 空を思ふの  
天相とくく 日月風を陰晴の  
又人事みても自も他も  
るあり 踏るも自も他も  
なり

朝すれ持り持夫持とく  
うしんはあもさるるあ  
かく踏る時あち由他の  
か

さへちん

中 日

はるるかきりるから後河川

く、跡るくわらなるも自のるふたる也  
是跡るをのそあるの自他をまじらば

祖翁曰縣るのりや念入りてはるる  
別之るの轉しこ

古人曰縣るのりやあるをうらまへて  
是中て之るの轉しこ

鳥酔曰縣るは有用ありては用安用り  
志て有用の跡るをみりよへて是を  
之るの轉しこ

白旗曰巻中のりくく味を若門  
縣るの意味をまじらば

俳諧寂琴卷之中終

凡の跡る也

鳥

鳥

